ファシズムの蠢動としての右派ポピュリズム

―参政党、維新の会、国民民主、旧自民党アベ派―

今、参議院選挙真っ只中で、参政党の躍進が危惧されています。多くの論者がすでにいろいろな角度から警鐘を発信しているのですが、そして、警鐘を鳴らすことが、余計に右派ポピュリズムに注目を喚起することの危惧も語られているのですが、ファシズム論的観点から問題をとらえてきた立場から（註１）、敢えて文をおこして、論的深化をなしておきたいとこの文を書いている次第です。

歴史は繰り返される

そもそも、自民党が政権から滑り落ちた中で、安倍元首相が2012年自民党総裁選挙で復活し、自民党政権に戻ってきたとき、欧米では、日本で極右政権が成立したと騒いでいたのです。日本の比較的リベラル系のマスコミはヨーロッパの極右の動きを警戒心をもって報じているのですが、自分たちの国におけるファシズム的動きを押さえ報じることをネグレクトしてきました。この第二次安倍政権の成立の際に、大阪で「維新の会」が旗揚げしていて、盛んに安倍元首相に秋波を送っていたのです。維新の会は、原発事故が起きて、脱原発、地方分権、行政改革とまさに当事話題になっていた政策を、ポピュリズム的に掲げ大阪の地方自治から関西へ勢力を拡げていきました。今日的にとらえると、原発政策は推進派に転換しました。地方分権は大阪都構想という東京に対する対抗意識で関西ナショナリスティックなポピュリズムで煽り、地方分権とは言い難い二極的中央集権にしようとしただけです。行政改革は大阪の地方公務員の「特権」なるものをスケープゴート的に叩き、リベラル系のマスコミ叩きをしてマスコミ総体を萎縮させ、ファシズム的支配の構造の中に叩き込んだのです。敵を作り、スケープゴート的に叩くという手法は、まさにファシズム的手法なのです。

今日、参政党がオーガニックや反ワクチンなどでポピュリズム的に支持層を拡げながら、国家主義的なところで、「日本人ファースト」という差別排外主義そのもので、敵を作っていくという維新の二番煎じ的ファシズム的政治で支持を集めようとしています。

国民民主は、玉木党首が右派ポピュリズム的手法をＮＨＫ党の立花孝志から学び、差別主義的な敵を作ることによって支持を集め、支持を取り込もうとしています。外国人排斥という右派ポピュリズム的マニュフェストを出そうとしていますが、支持母体の連合との関係でかろうじて抑え込んでいます。玉木党首自身は右派ポピュリズムなのですが、国民民主は労働組合を背景に持ち、かろうじてファシズム的なところを抑え込んでいる情況です。アベ派はまさに自民党内の保守派を押さえ込み、時には、保守から支持を得るために、自らの極右政治の支持をえるために、保守政治なことをも言い募り、結局アベ政治の失われた10年を生み出したのです。

ファシズム論からの論点整理

そもそも、リベラルな学者も含めて、左派、リベラル、保守、右派、極右＝ファシズムというとらえ方があまいなままです。例えば、トランプのファシズム的支持層を「岩盤保

守層」と言い方がリベラルなジャーナリストからも出されているのですが、そもそも保守というのは、現在資本主義社会では、資本主義社会の保持ということを第一の課題とするということです。それは、時には「自由と民主主義」とか、「法と秩序」とか、「国民の命と生活を守る」いうことも含んでいるわけです。トランプ政治は、「法と秩序の破壊」というところに踏み込む、右派政治どころか、極右＝ファシズム政治で、「岩盤保守」という詞が当たりません。ファシズム論がないところで、情況分析が的確になされていず、きちんと批判の鋭い提起が成されていないのです。日本におけるファシズム的動きの代表格の橋元徹元大阪市長・元大阪知事が、「ファシスト規定されることは欧米では政治的死を意味するから、安易にファシズム規定するべきではない」という話をテレビでしていました。まさに、ファシストは、本格的な始動以前の右派ポピュリズム的動きの中では、ファシズム規定されることを畏れるのです。ちゃんとファシズム規定をしきる中で、ファシスト達を政治的に葬り去る作業をしていかなくてはならないのです。

ファシズム論自体の整備

もう一つのファシズム論を巡る混乱があります。それは、ハナ・アーレントが全体主義という概念で、ファシズム概念を括ってしまったことです。それは、ソヴィエト・ロシアが社会主義の定立に失敗した国家資本主義でしかなかったのに、それを「社会主義」として規定し、しかも、その「社会主義」を全体に奉仕する個人という二項対立的なとらえ方をするところで、全体主義規定をしたことがありました。ファシズムは、決して個人の利益を滅して全体に奉仕するという体制ではないのです（註２）。個人の利益をきちんと追求しているのです。それはトランプ・ファシズムがアメリカ・ファーストを突き出しつつ、トランプ・ファーストになっていることと同断でもあります。

国家主義批判と反差別という地平からのファシズムの蠢動―右派ポピュリズム批判を！

問題は、反差別という地平が確立できない中で（註３）、安易に敵を作るという手法に民衆の浮動的な層がのってしまうことにあるのです。ファシズムに共通することは、国家主義・超国家主義と差別主義です。そのことをきちんと押さえたところで、国家主義批判と反差別ということでの突き出しが、今こそ問われているのです。

（註）

１　わたしのファシズム論は試論的に書き綴って、弁証法的に深化させようとしています。反差別資料室Ｃ　https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3
→B.「反差別原論」への断章　https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3/d　を参照ください。

２　これは、小説ですが、ナチスの隆起と滅亡を描いた「ベルリン三部作」とでも言うべき、作品の中で、クラウス・コルドンが描いています。
「通信」131 号 http://www.taica.info/adsnews-131.pdf 参照。

３　わたしはそもそも人権論などというキリスト教文化圏、すなわち「帝国主義」中枢国の論理で差別の問題をとらえてきたところで、自民党右派から「人権などというのは架空の概念だ」との批判もでているように（註４）、人権論では差別をきちんと問題にし得な

くなっていることがあるのだとも、押さえています。反差別論という形できちんと展開していくことだと念っています。

4　人権とは差別のない関係を物象化した謂いです。だから、自民党右派の「架空の概念だ」という批判には、では、差別をストレートに容認するのか、と反批判していくことです。差別という暴力を容認すること、これも物象化した謂いですが、「ひとは〇〇する動物である」という規定を引用してみると、ファシスト達の論理では、きっと「ひととは同種で殺し合う動物だ」となるのでしょうーファシスト達は、「障害者」や高齢者を社会に迷惑な存在として突き出していくのですが、実はこういうひとたちが、社会にとって一番迷惑な存在なのです。これについては、次号巻頭言「**なぜ、差別の極としての戦争をなくせないのか？**」で続きを書きます。

（み）

（「反差別原論」への断章」（104）としても）